

想

随



わが子は毎日勉強している。世のお母さま達が「おちこぼれ」自衛策に目の色変えるのも無理はない。所が先日そんな方々と話合せて分ったのだが、話題は「算数おちこぼれ」についてはかなりなのだ。勿論それでも大切で、大いに考え話あって頂くことだが、ただ算数の「おちこぼれ」は直ぐ目につくというだけで、もっと大きい問題として「国語のおちこぼれ」が潜在しているのを心配される方はなかった。

おちこぼれ

甲斐雅人

七五三といえは子どものお祝いかと思えば今は違うそうだ。高校生、中学、小学の児らの学習おちこぼれの割合だといふから驚く。小学生ですら三割が勉強についてゆけなくなっているという。文部省も対策研究中ではあるが、その間も

わが子は毎日勉強している。世のお母さま達が「おちこぼれ」自衛策に目の色変えるのも無理はない。所が先日そんな方々と話合せて分ったのだが、話題は「算数おちこぼれ」についてはかなりなのだ。勿論それでも大切で、大いに考え話あって頂くことだが、ただ算数の「おちこぼれ」は直ぐ目につくというだけで、もっと大きい問題として「国語のおちこぼれ」が潜在しているのを心配される方はなかった。

小学校で受持った児童と偶々一緒に中学校に転動し、六年間を共に過ごしたことがあるが、その中に算数、数学抜群の児がいた。国語も勿論中の上くらいの力は発揮していたが、やや軽く見ている様子であった。ともかく学力優秀で校外区外から熊本市の県立高校にも入り、高校でも数学では優れた成績を上げ自信溢れるスタートをきった。この児が二年の初め頃から、数学で追い抜かれ始めたと嘆きを洩らしていた。そしてしみじみ話してくれた言葉が心に残った。「何故彼らが追い越すのかと様子を見て分ったのですが、彼らは実によく本を読んでいるのです。初めは文学派だ位に思っていた彼らに負け始めたので、ぼくも今猛烈に読書をしています。」と。岡潔博士の「数学もまた情緒の表現である。」という言葉を読んで感動したのはそれから十数年の後になる。

「草むらにはもう虫が鳴いていた。」という日本語をアメリカの学生達に教えたが、彼らにはこの気分が全く分らない。日本人なら説明するまでもない情趣が全然分らなかったという。そういえば日本映画では加藤剛などが無然として月を仰ぎ叢の虫の音を聴いている場面にはよく出会うがジョン・ウェインがピストルを腰に虫の音をきく映画は無い。

お手玉

佐藤慶子

お手玉遊びをする為に炬燵の中で子供達と一緒にお手玉を作りました。

お手玉遊びをする為に炬燵の中で子供達と一緒にお手玉を作りました。見本を見せて好きな大きさに布を切り、俵の形になるように縫い上げるのですが、長過ぎたり小さ過ぎたりで形よくとはなかなか出来ないものです。小さい袋を作るのですから子供の手には扱いやすそうにみえますが、細かい作業だけに却って難しいようでした。それでも最後に口を縫ってキョットと締めるばかりになりましたが、さて何を入れようかと考えながら、子供の頃にジュズ玉とりに行った事が頭をかすめました。数年前までは白川沿いにジュズ玉を見かけたものですが今では目にふれるところには無く取りにゆく事もできません。

A子ちゃんは「ジュズ玉は何ね」と言いますし、B子ちゃんは「どうして無く

なつたと、誰が持っていたつね」等無邪気に問いかけてきます。とそばから上級生のC子ちゃんが「白川は危険区域だから行ったらいかんよ」ともっともな言葉も聞かれました。結局、行商のおばさんに頼んで「ソバガラ」を持って来てもらう事にしました。

「今どき、ソバガラもなかなか手に入りませんもんね」と言いながら持ってくる来もらった此の品も珍らしいものの一つになるのでしょうか。ソバガラと庭に落ちたドングリを拾ってほどよい重みをつけて袋の中に入れ、やっというんな形のお手玉ができ上りました。

「おひとつ おひとつ おさらひ」「おふたつ おふたつ おさらひ」歌にあわせているんなお手玉遊びを懐しく思い出しながらひろうしますと、子供達は出来上ったお手玉を両手に一つずつ持って右手と左手の交換するだけの事が出来ずに胸で押えながらそろそろとずらしたり、宙にほうり上げてそれを受けとるのに部屋中走りまわったり、かと思えば思いがけない子供が上手にあやつっていたりして、大にぎわいになりました。

相変わらずテレビからは聞きなれた歌が流れていましたけれども、子供達は飽きる事なく全身を使ってお手玉遊びに夢中で止めようともしませんでした。

最近、古いものが見直され大事にされるようになりつつありますが、昔から伝

わる「わらべ歌」や素朴な遊びも私共がいろんな機会をつくって次の世代へ伝えてゆかねばならないものの一つだと思えますし、これは家庭でも何処でも年齢をこえて楽しいひとときをつくることのできて、心を通いあわせるよい機会にもなるのではないかと私は思っています。

(菊水学園主事)

はばたけ

青春飛行

西正勝

ゆとりのある教育をめざして、教育課程の改善についての方向がまとまった。ほぼ十年ごとの教育列車のレールの取替えみたいなものである。

これまで高度成長の経済社会の影響を少なからず受けながら、ゆさぶられ、ゆれ動いてきた教育界であった。

受験のための灰色のつめ込み列車、そ

こから落ちこぼれた生徒たちの、無気力、無軌道ぶりなどが反省されるときでもある。そして、毎日、何十人も求人者が学校にタクシーで乗りつけ、生徒は「職はどこにでもあるから」という安易感にひたつた時代は終わった。若者たち、生徒の一人一人が、もっと、はつらつと、いきいきとできるような教育界の到来を、多くの人々が待望してきたのではなからうか。

だが、これまでも生徒たちが、学園が、いきいきと躍動する時があった。新入生が入ってきた春の新学期と、多くは稔りの秋に行われる体育祭と文化祭のときである。

「最近のバスには、イエロー・シートと呼ばれる老人や身障者優先の席が設けられています。あれを見るたびに、みんなが思いやりの心を持ちさえすれば……。いったいどうして、こんな世の中になったのだろうかと思うのです。利己主義と冷たい人間関係の現代社会から、心を開き、ふれあいを大切にする社会への胎動を、私たち、若者たちの手で始めねばなりません」。

私は、相撲部に入って、相撲に楽しみと喜びを見出すようになりました。厳しくとも、苦しくとも、今ならやれるのです。

相撲は、自分の力で立たねばなりません。どんなに苦しくとも、自分の足で立

つのです。

これが今の若者たちのすべてに言えることではないでしょうか。自分の足でしっかりと立ち、激しくぶつかり、青春の日を精いっぱい生きて行きたい。

この二つは、「はばたけ、青春飛行」——大地、夢、ふれあい——のテーマで開かれた私の学校の文化祭(南園祭)の弁論大会で熱く訴えられたものである。

暗幕で囲った中でのお化け屋敷や、陰々とした音楽にたむろしていた、かつての状況はめっきり少なくなった。

代って、薪を集め、杵と石臼を持ち込んでの餅つき大会、土つくり、有機農法の現地を求め歩いての展示、みどりの環境を生かして治水利水の農村整備のモデルを十日がかりで作あげたものなど、自分たちで計画し、活動するものが増え

てきた。安易と徒長の時代を脱却するときが来た。

今年巳の年

蛇穴をいでて 耕す日に新たな土の俳入・蛇笥の句であるが、生徒たちの間で、生徒と教師との間で、心のふれあいを求めながら、新しいものを創り出していく若者たちに期待する日々である。

若者よ はばたけ

はばたけ 青春飛行 (熊本農業高等学校教諭)